

平成21年5月17日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18530713  
 研究課題名（和文） 戦後初期国語科サブカルチャー（副読本・参考書等）に関する調査研究  
 研究課題名（英文） A Study on the supplementary reader in the early postwar years  
 研究代表者  
 吉田 裕久（YOSHIDA HIROHISA）  
 広島大学・大学院教育学研究科・教授  
 研究者番号：80108373

研究成果の概要：本研究で重点的に調査したブランゲ文庫所蔵の戦後初期（1946～1949）におけるサブカルチャーとしての国語副読本、学習参考書、問題集・ワークブック、教師用指導書の類は、当時の教育状況・学習状況を知りうる貴重な資料群である。ところが、これらの大半は、今日、国立国会図書館・国立教育政策研究所附属教育図書館をはじめとする国内の図書館等においてほとんど所蔵されていない。これらの資料を利活用する研究の必要性が明らかになった。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	480,000	3,180,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：戦後初期・国語科・副読本・参考書・ワークブック・問題集

## 1. 研究開始当初の背景

戦後初期の副読本・参考書等の編集・出版状況については、これまで、国定教科書の発行さえ用紙不足で新聞紙を流用して発行する状況であり、極めて貧しい学習環境であったという指摘がなされてきた。それを証左するように、「国民教育」・「日本教育」（ともに国民教育図書）等の教育雑誌ではその状況を補足するため、教師向けに補充教材を提供していた。そして、それが教師として、大人として当時できうる精一杯の努力であった。こうした受けとめが一般的であった。それもそ

のはず、国内の図書館等には、それ以上の実態を知りうる資料が欠落していたからである。ところが、アメリカのメリーランド大学マッケルディン図書館（平成20年1月以降は、同大学内ホーンベイク図書館）にあるブランゲ文庫には、日本では所蔵されていない資料群が大量に保存されている。本研究は、この保存状況を明らかにすることによって、そこから、これらの資料をサブカルチャーとしてとらえ、学習者の学習をどのように質的・量的に支えたのかを明らかにすることができるのではないかと思われ、着手すること

にした。

## 2. 研究の目的

戦後初期の国語学習の実態を解明するために、占領期間の検閲資料を集中的に所蔵しているプランゲ文庫（アメリカ合衆国メリーランド大学ホーンベイク図書館）における国語副読本、国語参考書、国語問題集等の目録作成およびその解説を施すことを中心にして、次のことを実施する。

(1) プランゲ文庫所蔵資料を中心に国内資料も合わせて、戦後初期国語副読本・学習参考書等に関する目録を作成する。

(2) 戦後初期国語副読本、学習参考書等と当時の国定国語教科書・検定国語教科書とを比較することによって、その実態・特色、及び位置づけ・意義について明らかにする。

(3) 戦後初期国語副読本、学習参考書等に関する調査・分析を通して、これら国語副読本・学習参考書等が戦後まもなくの国語学習にどのような役割を果たしたのかということについて明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) プランゲ文庫所蔵の国語副読本、学習参考書、および教師用指導書も含めて、その全容をつかむために現地調査する。

(2)(1)で確認された国語副読本、学習参考書等について、国内図書館（国立国会図書館、国際児童図書館等）で、その存在の有無、利活用の方法について調査する。

(3) 国語副読本、学習参考書等を国定・検定国語教科書と比較することによって、その実態、特色、位置、意義などについて明らかにする。

(4) 国語副読本、学習参考書等について解題・解説を付す。

## 4. 研究成果

### (1) 文献リストの作成

平成18年9月、同19年3月、同20年1月、同9月の合計4回、プランゲ文庫に実地調査した。国語教科書、国語副読本、国語参考書、国語問題集、教師用指導書等について、その表紙・目次、奥付、それに内容の一部をデジタルカメラで撮影した。こうした「副読本」をどの範囲に限るかということ自体もなかなか難解であった。というのも、プランゲ文庫の書庫を見て、いわゆる副読本に該当すると思われるその対象の量の多さに圧倒されたからである。これを一括して副教材、副読本と呼ぶには概括過ぎる、領域ごとに分類しなければならなかった。小学校が2棚、中学校が6棚、高等学校が6棚、それに教師用が1棚、合計15棚もあり、概数にして1,500冊に及ぶと思われた。国語関係のものに限ってでもある。全教科に広げれば、さら

に膨大な量となる。これを1冊ずつ、「筆者・編集者、書名、発行所、発行年月日、総ページ数」の項目でリスト化した。まず小学校、次に中学校、そして高等学校、最後に教師用参考書へと拡大していった。

したがって、まずは学校群を

小学校

中学校

高等学校と分け、

そして教師用を別立てした。これは、プランゲ文庫の分類もそうになっていたからである。しかし、プランゲ文庫にはその下位分類はなく、言わば順不同で配架されていた。私の調査は、「他日見ることができること」、「他の人も見ることができること」という原則を立て、これに従って、目録を作成し、一応完成させた。いまその下位項目を示すと、

①国語教科書

②国語参考書、国語問題集、国語自習書、国語独習書、国語学習書、国語ワークブック、国語の手引き、国語ハンドブック、国語ドリル、国語練習帳、練習ノート、国語テスト、古典の解説・解釈・鑑賞・詳解・校注

③国語副読本

国語副読本に類似のもの 学年が指定・想定されている児童文学、児童読み物等

④教師用参考書、国語辞典等

つまり、大きくいうと、○国語教科書および教科書に直接付随しているもの（問題集、学習参考書、ワークブック等）と、○国語教科書から独立したもの（副読本、児童読み物）とに分類できた。

これら1冊ごとに、前述のように、著者・編集者、書名、発行所、発行年月日、総ページ数を調べ、文献リストを作成した。

なお、この間、私の本作業と平行して、メリーランド大学図書館によって教育図書目録（『メリーランド大学図書館ゴードンW. プランゲ文庫所蔵教育関係図書目録』、2007.1）が作成されたり、国立国会図書館によってこれらの資料の一部デジタル化（児童文学）のプロジェクトが進行したりしている。こうした各方面からのこれらの資料に対する着目は、これらの資料が、戦後初期のサブカルチャーとして、また教育（とりわけ国学習）の周辺資料として資料性が高いことを奇しくも物語っていると見て良からう。

### (2) 国語副読本の編集・発行

時期的に言えば、戦後間もなく、そして昭和21年の段階で早くも問題集、学習参考書、副読本等が精力的に編集・発行されている。中には時代を反映してガリ版印刷のものも見られる。その一方で、格段に美しいカラー版として発行された児童書も多く目立っている。文部省から発行された暫定教科書・国定教科書でさえ、単色の粗末な造本であるの

に比して、この豪華さはまさに目を見張るほどである。ことさらこの傾向は、児童文学において顕著である。

### (3)国語教科書

量は少ないながら、国定国語教科書(国定第六期小学校国語教科書『国語』(通称「みんないいこ」)、「まことさんはなこさん」、『中等国語』、『高等国語』など)がブランゲ文庫に所蔵されている。そして CCD(民間検閲支隊)の印、及び表紙に番号が振られているものがある。ただし、内容的には検討・検閲の跡は伺えない。しかし、CIE(民間情報教育局)で検閲済みのものが、なぜ CCD に提出されたのか。この間の事情は分からない。

### (4)副読本・児童文学

#### ①全国版

副読本、とりわけ児童文学、総じて児童読み物の編集・発行には、児童文学作家(坪田譲治・浜田広介・平塚武二・関英雄・村岡花子・二反長半)や国語教育界のリーダー(石森延男・垣内松三・西原慶一・田中豊太郎)、国語教育の実践家(飛田多喜雄・泉節二)が積極的にかかわり、これらの質を高めることに貢献しているように思える。子どもの教養・教育を支える出版文化は、こうして堅実・健全であったと言える。

例えば、次のような児童文学が、この時期に出版されている。

- ・新日本児童研究会『新日本児童読本』(1年～6年)
- ・児童文学者協会(坪田譲治)『文学読本』(小学1年生～小学6年生)
- ・大木雄二『一年生の童話』他
- ・村岡花子『二年生の童話』他
- ・平塚武二『新せん三年の童話』
- ・谷村能男『青い家』・『児童読本』、昭 22、奈良文庫
- ・家の光青少年少女文庫、昭 23・24
- ・銀の鈴文庫、
- ・小学生文庫、昭 23、美和書房
- ・6・3文庫、昭 23・24、季節社

そして、副読本(全国版)には、次のようなものが見られる。

- ・西原慶一『一年生の副読本』、石森延男『二年生の副読本』、田中豊太郎『三年生の副読本』、昭 21、新文化社
- ・篠原重利監修『副読本(四年生～六年生)』、昭 22、児童文化研究会
- ・日本新教育研究会(高橋誠一郎)『こくご三』他、昭 23、学校図書
- ・つばさ読本(ぼち・たま、はこにわ、とんびと白、カールのこと、ガリバー旅行記、美しき水の流れ、あふれる水、スポーツの道、スイスの旅—小学一年生～中学三年)、昭 24、東北教育図書(他の地域からも)

#### ②地方版

こうして副読本は、全国版として発行されるとともに、地域、県単位での地方版も発行されている。この地方版の刊行も、この当時の一つの特徴かと思われる。

例えば、次のような地方版の副読本がこの時期、出版されている。「地方の児童文学」の先駆けとあって良い。この時期に、編集・発行の実務は大変であったことが予想される。それを超えての刊行は、まさに驚嘆に値する。中でも、鳥取県教職員組合から刊行された「二年の国語」(六年生版まで)は、注目される。いま「五年の国語」(昭 23.8.10)の目次を書き出すと、次のようになっている。

- 1 村をのぼれば
- 2 金のまど
- 3 こどもとことば
- 4 えだまめこぎ
- 5 いっぴきの魚
- 6 空
- 7 魚の愛情
- 8 劇のけいこ
- 9 あらし
- 10 いいにくいことば
- 11 温せんの研きゅう
- 12 ふんすい
- 13 青麦
- 14 青いかき
- 15 おそうじの日記
- 16 帰り道
- 17 おばけ大根
- 18 じいさんとます
- 19 ローマ字のおべんきょう

時代を反映するもの、ローカルなものなど、非常に充実した内容になっている。

こうして見たとき、児童文学と副読本とはその境界(分類)が困難である。児童文学の中にも「小学〇年生用」などと表記されたものがあり、副読本との区別が難しい。分類することに意味があるのではなく、子どもの読み物としてどのような出版物があったのかという視点から、現時点では両者を区別することなく含めて捉えるべきかと考えている。

#### (5)教科書準拠の参考書・問題集等

教科書準拠の学習参考書・問題集等は、これまた想像以上に多く(多種多様)の種類が発行されている。しかし内容的には類似のものが多く、競うようにして出版した形跡も感じられる。

##### ①小学校の参考書

- ・新教育研究会『小学三年国語参考書』他、昭 22、新教育会
- ・『初等科国語学習書』(第四学年中巻)他、教育同人社、ガリ版印刷
- ・池田龍太郎『新しい国語参考書 五年用』

- 他、昭 21、平和出版社
- ・学友社編集部『五年の国語学習の研究』他、昭 22、学友社
- ・小学教育研究会『国語新研究四年』他、昭 24、新協出版社
- ・伊藤伝吉『小学校の国語四年上』他、昭 23、新泉社

## ②小学校の学習書・自習書

- ・池内房吉・山田耕平『優等生の新編模範国語四年』他、昭 23、新興出版社
- ・教学研究社編集部『予習・復習・新考査国語模範学習書四年』他、昭 22、教学研究社
- ・新教材研究会『文部省新制定による五年の国語学習書』他、昭 23、有文堂
- ・国語文化教育会『家庭で力のつく小学生国語自習書第五学年用』、昭 22、秋栄書房
- ・国語文化教育会『自由に学びの力がつく小学生の国語五年前期』、昭 23、秋栄書房
- ・国語文化教育会『分かり易く力のつく小学生の国語 第五学年中』、昭 22、秋栄書房
- ・伊藤伝吉『小学生の国語自習書四年中』他、昭 23、清水書院
- ・国民図書刊行会『国語の自習五年前期』他、昭 23
- ・新日本教育研究会『小学校国語自習書第四学年上』他、昭 22、誠和書院
- ・小学教材研究会『国語学習書四年中』他、昭 22、文英堂
- ・東京国語教育研究所『国語ハンドブック六年上』、昭 23、児童教育研究会
- ・東京国語教育研究会『新しい国語のワークブック第五学年中』他、昭 24、文進堂
- ・興水実・小島忠治『国威語のワークブック第五学年上』、昭 23、国語文化学会

## ③小学校の学習の手引き

- ・京都市国語教育研究会『国語学習の手引第五学年中』他、昭 23、日の本教材社
- ・学友社編集部『国語学習の手びき 初等科国語六』他
- ・学進書房『国語の手びき 第五学年上』、昭 23、学進書房

これらの中から、学習指導研究会（東京第二師範女子部附属小学校内）『学習の手びき四年前期用』の「まえがき」（みなさんへ この本のつかい方）の一部を引いてみる。

1、「この課の学びかた」では、○この課のねらいどころ、○どうべんきょうすればよいか、○自由けんきゅうの手がかり、などについて力をかしてくるでしょう。

2、「文字の読み」は、あたらしいかん字、読みにくいかん字の読みかたをしめしてあります。

3、「ことばのけんきゅう」は、むずかしいことばのいみ、やさしいことでも文のなかでだいじなところを、せつめいしてあります。

4、「れんしゅう」は、この課を学習し

て、なかみが、よくわかったかどうか、自分でためしてみるのです。そして、はじめにいった国語の四つの力をのばしていくことです。

5、「さんこう」は、その課についてたいせつな話をのせてありますから、自由けんきゅうをするのにやくだててください。

6、「父兄の方へ」は、みなさんのおとうさん、おかあさんに読んでいただきたいと思います。

このほかに「テスト」がついています。これによって、自分の力をためして、よいところはのばし、たりないところは、いっそうはげんでください

こうして、参考書・問題集は教科書準拠のものが多く見られる。国定教科書・検定教科書の予習・復習など、日常の学習にそのまま使えるものとして編集されている。ただ、この参考書・問題集は、教科書準拠ということもあってか、構造・内容が極めて近似しており、多くが、解題、語句解説、学習の手引きなどとなっている。

そして、その影響か、それらの書名が、次第に競うように、「楽しく学べる」「新しい学び方」「一番わかりやすい」「必ず力のつく」「優等生の」など、大げさな書名になっていったようである。

## ④中・高等学校の副読本・参考書・問題集

こうして国語副読本・参考書・問題集の発行は小学校向けのものが圧倒的に多いのであるが、中・高等学校向けのものも、当時の出版事情に照らしてみると、決して少なくない。中学校—132冊、高等学校—490冊を数えている。そして、どちらかというところ、中学校は教科書準拠の解説・問題集が中心で、高等学校は日本文学史、古典作品別（源氏物語・枕草子・徒然草等）解釈、国文法解説など、やや一般的な解説・研究書が中心になっている。そして、これも小学校で指摘したと同様に、その大きな特色として、類書の多さが目立っている。

## ⑤中学校

まず中学校用のものを抽出してみる。

- ・鳥取県教職員『国語副読本中学校一年用』他、昭 23
- ・大木信夫『一番わかりやすい私たちの国語一年下』他、昭 24、新興出版社
- ・学生の友社編集部『たのしくまなべる私の国語新制中学一年用』、昭 22、学生の友社
- ・学修研究会『新制中学校中等国語の独習一年用』他、昭 22
- ・清水書院編集部『新制中学校中等国語自習書第一学年用』他、昭 22、清水書院
- ・自修書房編集部『新制中学校用「中等国語」精解国語自習書第一学年用』他、昭 23、自修書房
- ・中等国語研究会『新制中学一年国語模範自

習書』他、昭 23、中教社

- ・教育文化研究会『ドリル式中学一年の国語第一学期用』、昭 23、教育文化研究会
- ・三木秀作『workbook 文部省中等国語一』他、昭 23、奈良文庫
- ・中等教育研究会『新しい効果判定法による中等国語練習帳』、昭 24、東書房
- ・文部省内国語教育研究会『中等国語学び方第一学年用全』他、昭 24、日本教科書株式会社
- ・興水・飛田他『中等国語学習の手引解説第一学年用』他、昭 23、国語文化学会
- ・広島高等師範附属中等国語研究会『中等国語の正しい研究一学年用1の2』、昭 23、修文館

これらの中から、その一例として、新日本辞書出版社編集部『中等国語一の2 独習書』（昭 22、新日本辞書出版社）の「はしがき・この本での勉強のしかた」を引いてみる。

〔はしがき〕

日本は新しく生まれ変わった。新しい憲法ができた。新しい教育制度が実施された。そして、学校の教科目も変わった。社会科のような新しい教科もできた。

そして、最もいちじるしい変り方をした学科のひとつは国語であろう。当用漢字が制定されて漢字の数がずっとへり、その使い方が改められた。さらに現代かなづかいがおこなわれて、普通に書かれた文章は、今までとずっと変わった外見をとることになった。外形ばかりでなく、内容も違って、古典などはずっとすくなくなつた。

その新しい国語をどう学んだらいいか。国語の学び方も当然新しくならなければならない。従来の古い型の学習書は「虎の巻」によって、むずかしい漢字や語句の単なる解釈を見て、すましていてはならない。

この本は、この新しい国語に即して、正しい学習の助けとなり、導きをするように書かれたものである。国語の力を十分につけることができるようにあまれた本である。国語学習の指導書、参考書として、これをよく活用し、その力をのばして、りっぱな成績をあげてほしい。

〔この本で勉強のしかた〕

この本は、はしがきにもある通り、新しい国語の学習指導書として書かれたものであるから、単にむずかしい字句の説明ばかりでなく、いろいろのことがあげてある。

教科書の本文を、内容によっていくつかの段落をわけ、それに「注意」をつけてある。古典、その他特別なものには、さらに「通釈」をそえた。詩歌については、「大意」をつけた。

各課の終りには、編著者、編著に関する説明、その課の「要旨」、「教材」の様式、文章、「内容」と段落、それに「学習指導

の各項がそえてある。

勉強には、なんといいっても、まず本文をよく読んでみるのが大切である。はじめから「注意」にたよってはならない。それから「注意」には、少し程度の高いことも述べてあるから、必ずしも全部を覚える必要はない。

各課の終りにつけてあるいろいろのことは、すくなくとも復習の折には、ぜひ読んで、これを学習してもらいたいと思う。

中学校の参考書・問題集は、かなり定式化して、教科書本文・注意・通釈・大意・要旨・学習の手引きの解答例などとなっていて、今日のいわゆる学習ガイドに近いものになっている。「虎の巻」という呼称も見られている。

### ⑥高等学校の参考書・問題集

高等学校の参考書・問題集は、小・中学校と同様に、教科書ガイド的なものと、いわゆる大学受験用のもの、さらには古典（古文・漢文）に顕著な注釈書（現代語訳・解説）の三者が認められる。

教科書ガイド的なものとしては、

- ・清水書院編集部『高等国語自習書一下』他、昭 22、清水書院
- ・新日本教育研究会『高等国語詳解』、昭 23、誠和書院
- ・浅尾芳之助『ひとりで学べる新制の国文法 文語篇』他、昭 21、など、かなりの数が発行されている。

また、大学受験用としては、

- ・保坂弘司『現代文の新研究』、学燈社
- ・末政寂仙『学修受験現代文解釈法』、昭 22、学修社
- ・森本種次郎『学修指針受験の要諦 現代文 精粹』、昭 22、大阪隆文堂
- ・山海堂編集部『大学入試実力養成国語問題集 3』など、これまた多くが所蔵されている。どんな環境下にあっても、大学入試は大きな課題であったようである。

さらに、古文・漢文の注釈書としては、

- ・中等国語研究会『抄本徒然草』・『抄本方丈記』、昭 23、健文館
- ・高等教育研究会『新制高等学校用つれづれ草選』、昭 24、高等教育研究会
- ・塚本哲三『基本漢文解釈法』、昭 22、友朋堂
- ・清水書院編集部『高等漢文自習書第一学年用』他、昭 23、清水書院

『校注』『抄本』『選』などの形で、万葉集（上古）から西鶴（近世）に至るまで、精力的に出版されている。

### ⑦教師用指導書

単行本の内容上の特徴として、新教育を展開する意気込みが感じられるものが多く、開発・新生の進取の気風の中で、教育への情熱、子どもへの期待が熱く伝

わってくる。混沌としたリ・スタートの中から、教育の原点、教育の普遍性を再思させられる。

- ・篠原利逸『新しい国語教育の方向』、昭 24、健文社
- ・文部省国語教育研究会『小学校国語学習の手引き』(第2学年用～第6学年用)、昭 24、時事通信社
- ・吉田瑞穂『国語の学び方』、昭 23、伎報堂など、これらについては、今日でも大学図書館等でも見ることが多い著書である。

## (6)所蔵状況

またこれらの資料の蔵書状況を国内の図書館(国立国会図書館・国際児童図書館・大学図書館等)で検索したところ、ほとんどのものが未所蔵であることが分かっている。国語副読本については児童文学との境界が必ずしも明確でないこともあって、断片的にはあるが所蔵が期待できそうである。しかし、問題集・学習参考書などの所蔵は皆無に近い状況である。とりわけ後者は児童生徒の国語学習に直接影響を及ぼすサブカルチャーであるだけに、これらの検討は必須となる。こうしたことから、国内資料だけで研究を展開した場合、これらの資料の存在に気づかず、果てはこれらの資料が無かったものとして研究することにもなりかねない。近辺に資料が見いだせない時、非存在として判断してしまう危険性がここにもあり得るのである。

### おわりに

以上、プランゲ文庫では、(1)国語教科書を中核にして、(2)教科書教材を解説・解釈した学習参考書・ハンドブック・学習の手引き、(3)教科書教材を問題集の形にしたワークブック・自習書、(4)その周辺を成す児童読本・読み物、さらに(5)教師用教授書、古文・漢文などは一般的な解説書・研究書として発行されたものも大量に所蔵している。本報告では、これらを合わせて「副読本」として認定している。国定教科書の発行さえまならなかった戦後初期に、こうした児童文学・副読本が多種・大量に発行されていたということ自体、すでに驚きであるが、内容の面から見ても充実したものになっていて、当時の教育関係者の並々ならぬ努力の跡がうかがわれる。

そして、国内の図書館等においては、これらのうち単行本の所蔵は散見されるが、ここで重点的に調査した国語副読本、学習参考書、問題集の類は、国立国会図書館・国立政策教育研究所教育図書館を初め、殆ど所蔵されていない貴重な資料群であることが分かった。

紙不足の時代と言われ、教科書の発行さえ危ぶまれながら、サブカルチャーとしての副

読本、参考書、問題集の類は、多種・大量に編集・発行されている。この現象について、子どもへの大人の責任の反映と受けとめるべきか、それともいかなる時代にも存在する商業主義(商魂たくましい)と受けとめるべきか。

さらに、経済的に逼迫した時代にあって、これらが実際にどのように利用されたかについてはこれからの課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔その他〕

○シンポジウム(計1件)

本研究に深く関わるものとして、平成19年8月6日、九州大学(西新プラザ大会議室)で開催されたシンポジウム(被占領下の国語教育と文学—プランゲ文庫所蔵資料から)がある。筆者(吉田裕久)はシンポジストの一人として「プランゲ文庫資料から見える戦後初期国語教育—国語教科書・副読本の実態と特色—」を研究発表した。

○報告書(計1件)

その報告書として、2007年プランゲ文庫福岡シンポジウム記録出版実行委員会(代表:横手一彦)『シンポジウム 被占領下の国語教育と文学—プランゲ文庫所蔵資料から—』(平成21年4月29日、メリーランド大学図書館ゴードン・W・プランゲ文庫)が刊行された。

同書に、吉田裕久「プランゲ文庫資料から見える戦後初期国語教育—国語教科書・副読本の実態と特色—」(pp.54~60)が、収録されている。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 裕久 (YOSHIDA HIROHISA)  
広島大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 80108373

(2)研究分担者

(3)連携研究者